



2004 vol.26

# 国際交流レター

International Exchange Letter

## 国際交流レター

2004 Vol.26

## C O N T E N T S

<b>巻頭言</b>	<b>1</b>	<b>交換留学生(派遣)体験記</b>	<b>14</b>
国際交流委員長 佐藤 勇治		桑本 理多可 (商学部 経営学科) University of Wisconsin, Eau-Claire (アメリカ ウィスコンシン州オークレア市)	
<b>TOPICS</b>	<b>2</b>	渡邊 衣美 (外国語学部 英米学科) Liverpool John Moores University (イギリス リバプール市)	
第14回留学生弁論大会		上田 梨世 (社会福祉学部 第二部社会福祉学科) La Trobe University (オーストラリア ビクトリア州 メルボルン市)	
短期語学ホームステイプログラム		大洞 時子 (外国語学部 東アジア学科) 大田大学校 (韓国 大田広域市)	
ベトナム国家大学ハノイ校、チュラロンコーン 大学交換留学生第1回派遣		大川内 良太 (外国語学部 東アジア学科卒業) 北京外国語大学 (中国 北京市)	
<b>協定校紹介&amp;担当者の声</b>	<b>4</b>	本田 美香 (外国語学部 英米学科) University of the Incarnate Word (アメリカ テキサス州サンアントニオ市)	
デニス ルクレア 氏 セント・メアリーズ大学 国際交流部長 Mr. Denis Leclaire, Director, International Activities Saint Mary's University		前田 麻美 (経済学部 国際経済学科) 広西師範大学 (中国 桂林市)	
メアリー ジョー リンチ 氏 カールトン大学 国際交流部長 Dr. Mary Jo Lynch, Director, International Programs Carleton University		<b>短期派遣留学生体験記</b>	<b>20</b>
<b>国際交流会館紹介</b>	<b>6</b>	坂本 和徳 (社会福祉学部 社会福祉学科) Liverpool John Moores University (イギリス リバプール市)	
ロイさんの国際交流会館(留学生寮)紹介		田川 容子 (外国語学部 英米学科) University of Ulster (イギリス 北アイルランド コールレイン市)	
<b>正規留学生体験記</b>	<b>8</b>	<b>短期語学ホームステイプログラム体験記</b>	<b>21</b>
朴 光 明 (商学部商学科)		池田 優 (経済学部 経済学科) La Trobe University (オーストラリア ビクトリア州 メルボルン市)	
<b>交換留学生(受入れ)体験記</b>	<b>9</b>	遠藤 裕理 (商学部 商学科) UNITEC (ニュージーランド オークランド市)	
金 暲 珍 Carroll College (アメリカ モンタナ州ヘレナ市)		<b>ホストファミリー体験記</b>	<b>22</b>
Mark Crosby Saint Mary's University (カナダ ノヴァスコシア州ハリファックス市)		加納 麻衣 (外国語学部 英米学科)	
Rebecca Lee La Trobe University (オーストラリア ビクトリア州 メルボルン市)		<b>教員交流</b>	<b>23</b>
崔 珍 美 大田大学校 (韓国 大田広域市)		金 栄 緑 経済学部助教授 (アメリカ モンタナ州ミズーラ市 モンタナ大学へ派遣)	
クラウキチクル プフルッチパン チュラロンコーン大学 (タイ バンコク市)		朴 喜 南 大田大学校教授 (韓国 大田広域市)	
		野間 重光 経済学部教授 (韓国 大田広域市 大田大学校へ派遣)	
		<b>交 流</b>	<b>26</b>
		国際交流写真館 2004年行事一覧	
		<b>DATA</b>	<b>30</b>
		2004年度出身国(地域)別留学生数 本学留学生への主な案内(2003年度) 交換教員紹介、2004年研修団往来	

## 「国際交流の充実に向けて」

第9代国際交流委員長

佐藤 勇 治



約20年前に本格化した本学の国際交流も順次拡大し、現在では9カ国20大学との交流を行うまでに成長している。世界各地から訪れる留学生が本学で学ぶ姿を見るにつけ、海外の協定校へ短期・長期留学、あるいは海外研修へ出かけた本学学生の帰国報告を聞くにつけ、本学がこれまで育ててきた国際交流事業の成果のすばらしさを感じると共に、このような姿に育ててこられた先輩諸氏の努力に敬意を表したい。

これまでの20余年を基礎と発展の時代とすると、これからの10年は充実の時代ではないかと考えている。国際交流業務を担当して10ヶ月ほどになるが、この間に何を充実させればよいのかについて、その課題と感じたことをいくつか述べてみたいと思う。

交流の内容について見ると、現状では学部学生の短期と長期の交換留学が国際交流の中心であり、その他に1ヶ月ほどの海外研修や1週間ほどの海外訪問といったものがある。これらの活動はこれからも大切に発展させるにしても、今後は従来の枠に入りきれない交流形態が出てくることも予想されるので、それらに対処できるような交流体制を整備していくことが必要である。

例えば、大学院レベルでの学生交流がある。学部と違い研究が中心の交流なので、その受け入れや派遣に関する体制も学部とは自ずと異なるわけであるが、どのような姿が本学にふさわしいのか、関係者が知恵を出し合い検討を進める必要がある。既に、この件については5年前から少しずつ実現へ向けた歩が始まっているが、一日も早く第一歩を踏み出せるようにすることが望ましい。

他にも、協定校を足場にして様々な研修や研

究活動に携わりたいと考えている学生を、どう支援するのかという面もある。協定上はこのような活動を行うことが可能だとしても、その具体的支援内容についてはこれまで検討されたことは無い様である。教職員の研修や研究活動についても同様のことが言える。

協定校との交流だけでなく、全世界を対象にした国際活動に関する、様々な情報提供などの支援サービスも拡充する必要があると思う。外国の大学に留学できる奨学金情報、海外の大学で語学研修ができる情報、特定のテーマで研究ができる研究機関情報など、在学生在が自力で国際活動ができるような支援を、留学カウンセリングサービスも含めて提供することが、国際交流の幅を広げることになるであろう。

学生部の調査によると、本学の国際交流についてその内容をよく知らないとか、あまり関心がない学生が約4割いるようである。この数字からすると、国際交流について認識を深めてもらえるような工夫が必要なようである。国際交流は在在生全てが参加でき、何らかの利益を享受できるものであることが望ましい。この意味では、これまで以上に学生が外国で学びやすく、本学の留学生との交流がしやすいような環境を作る必要がある。

言語未習のため派遣が難しい非英語圏との交流をどうするか、本学にとって望ましい交流先や規模はどの程度か、学内の施設・設備はこれでよいのか、留学生に対する学習・生活支援はこれでよいのか等、国際交流をめぐる課題は多い。「言うは易く、行なうは難し」ではあるが、本学の国際交流事業の更なる充実のために、できるところから改善を試みたい。関係諸氏のご協力をお願いしたい。

## ◇第14回外国人留学生弁論大会

～ セント・メアリーズ大学からの交換留学生コリン レニーさん 最優秀賞に輝く ～

第14回外国人留学生弁論大会が平成16年6月19日（土）午後1時30分より、本学学生会館4階多目的ホールで行われた。6カ国9名の外国人留学生が、日本での留学生活の中で感じたことや考えさせられたことなどを流暢な日本語で熱弁をふるった。会場には、高校生・学生・市民ら約150名の聴衆が集まり、立ち見が出る盛況ぶり。弁論者の応援団も会場を賑わせて、大会は大いに盛り上がった。

審査の結果、北海道のアイヌと九州との関連について発表した、カナダのセント・メアリーズ大学からの交換留学生Colin Rennie（コリン レニー）さんが最優秀賞に、また聴衆者投票によるオーディエンス賞には、優秀賞内容部門を受賞した中国深圳大学からの交換留学生付細月（フ サイゲツ）さんが選ばれた。

また弁論大会終了後には、留学生、審査員をはじめ、当日の来場者が参加し、7号館教職員食堂で茶話会も行われた。



〈後列左から〉 マーク クロスビーさん、パトリック ミラーさん、コリン レニーさん（最優秀賞受賞）、宋命燮さん、孫鵬さん  
 〈前列左から〉 クラウキチクル プフルッチパンさん、付細月さん（優秀賞内容部門およびオーディエンス賞受賞）、チン ティ フォン タオさん（優秀賞日本語部門受賞）、潘燕萍さん（優秀賞技術部門受賞）

賞	氏名	出身国	所属	テーマ
最優秀賞	コリン レニー Colin Rennie	カナダ Canada	英米学科 2年	九州の先住民はアイヌ
優秀賞（内容部門） オーディエンス賞	フ サイゲツ 付細月	中国 China	国際経済学科 3年	フェアプレーの精神の花を咲かせましょう
優秀賞 （日本語部門）	チン ティ フォン タオ Trinh Thi Phuong Thao	ベトナム Vietnam	経営学科 4年	私のアイドル
優秀賞 （技術部門）	パン イェン ピン 潘燕萍	中国 China	経営学科 3年	I have a dream
努力賞	マーク クロスビー Mark Crosby	カナダ Canada	国際経済学科 4年	世界の旗
	ソン ホウ 孫鵬	中国 China	経営学科 2年	熱烈的雑談室
	クラウキチクル プフルッチパン Glawgitigul Phrudtipan	タイ Thailand	国際経済学科 4年	食べることについて
	パトリック ミラー Patrick Miller	アメリカ U.S.A.	国際経済学科 4年	おみやげ
	ソン ムン ソップ 宋命燮	韓国 Korea	経営学科 4年	時間の価値

## ◇新プログラム2004年2月スタート ～短期語学ホームステイプログラム～

どの学部 of 学生でも語学向上のために気軽に参加できるプログラムとして、平成16年2月に短期語学ホームステイプログラムがスタートした。第1期生は、本学の協定校であるオーストラリア・ラトロブ大学に21名、ニュージーランド・ユニテックに10名派遣された。

約4週間ホームステイをしながら生活習慣や文化を学び、大学の語学学校では外国人向けのそれぞれのレベルに応じた語学コースで英語を学んだ。

様々なことを考えさせられた、やる気が倍増した、自分を省みる機会になった、など参加者には大変好評で、ステップアップとしてのプログラムとして大成功であった。



ラトロブ大学 (オーストラリア)



ユニテック (ニュージーランド)

## ■平成16年度交換留学生

～ベトナム国家大学ハノイ校とチュラロンコーン大学に第1期生を派遣～

東南アジアの協定校であるベトナム国家大学ハノイ校 (ベトナム) およびチュラロンコーン大学 (タイ) に、初めての交換留学生がそれぞれ1名ずつ派遣された。

ベトナム国家大学ハノイ校 (ベトナム)  
【派遣期間：2004年9月～2005年7月】



社会福祉学部  
第二部社会福祉学科4年  
権藤 真由美さん

抱負：

ベトナムの人々の生活環境を肌で感じ、また発展途上国である国の変化も長い目で見ていきたいと思っています。

チュラロンコーン大学 (タイ)  
【派遣期間：2004年7月～2004年12月】



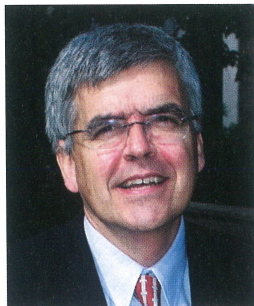
経済学部  
国際経済学科4年  
荒木 亜衣さん

抱負：

私がタイへ行くのは半年間ですが、それ以上のものにできる様、色々な事を吸収し、また私も与えることが出来ればと思います。

## セント・メアリーズ大学 (カナダ)

Saint Mary's University



デニス・ルクレア氏  
国際交流部長

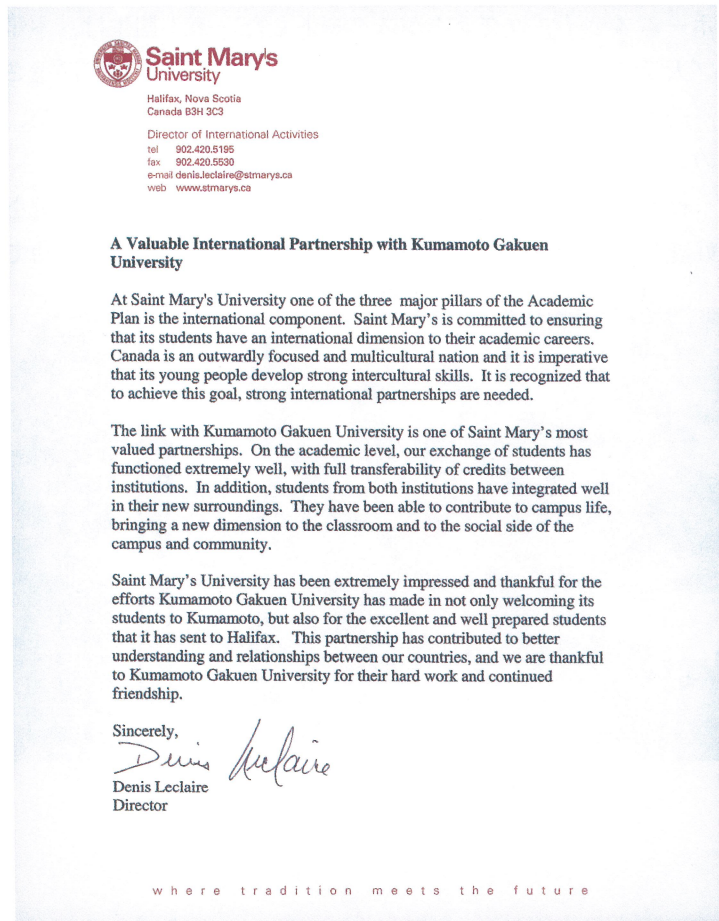


### セント・メアリーズ大学

1802年創立。緑豊かなキャンパスは、近代的設備を積極的に取り入れており、大学のプログラムは国内でも高い評価を受けている。世界各国からの留学生が就学し、国際色豊かな大学でもある。

セント・メアリーズ大学が位置するハリファックスはカナダの東海岸に位置する港町。

本学とは2000年に交流協定が締結。



### 熊本学園大学との価値ある国際交流：

セント・メアリーズ大学における教育の3つの支柱の一つに、国際的な要素がある。セント・メアリーズでは、学生が在学中に国際経験を確実に持つことができるよう取り組んでいる。カナダは外に開かれた多文化国家であり、若者が異文化に対応できる強い能力をはぐくむことが必須である。この目的を達成する為に、セント・メアリーズでは強い国際協力関係が必要であると認識している。

熊本学園大学との結びつきは、セント・メアリーズにとって最も重要な協力関係のひとつである。教育面においては、両大学の単位互換性のある交換留学が非常によく機能している。更に、両大学の学生達も新しい環境にうまく溶け込んでいる。

彼らは、教室やキャンパスあるいは地域社会に新しい風を吹き込み、大学生活に貢献してきた。

熊本学園大学が私達の学生を熊本に歓迎してくれるだけでなく、よく心構えのできた素晴らしい学生達をハリファックスに派遣してくれる尽力に対し、セント・メアリーズ大学は非常に感銘を受け、また感謝している。この協力関係は、両国のより良い理解と関係に貢献しており、私達は熊本学園大学の尽力と変わる事のない友情に感謝したい。

敬具

国際交流責任者  
デニス・ルクレア

# カールトン大学 (カナダ)

Carleton University



Office of the Director  
Carleton International  
510H Tory Building  
1125 Colonel By Drive  
Ottawa, ON K1S 5S6 Canada  
Tel: (613)520-2519  
Fax: (613)520-2521

## Message from the Director of Carleton International

Internationalism has been an integral part of the university tradition for centuries. Throughout history, university scholars have engaged in a lively exchange of ideas—sharing their knowledge and discoveries with academic colleagues across borders, across cultures, across time. But today, the university's long-standing tradition of internationalism is assuming dimensions that would astonish our academic forebears. Revolutionary advances in information technology, an explosion of knowledge, a globalized economy and the increasing realization that many of the challenges facing this and future generations are best addressed through co-operation and collaboration are inspiring universities to reach out to one another and to others in the global community as never before.

For these reasons, Carleton University is especially proud of its exchange linkage with Kumamoto Gakuen. Since its inception three years ago, this exchange has offered our students an extremely positive experience. In return, we have been most impressed by the high caliber of Kumamoto students who have studied and are currently studying here at Carleton. It gave us great pleasure to host a delegation from Kumamoto this past year, and we hope it will be possible to have a repeat visit. We extend our warmest regards to our friends at Kumamoto Gakuen and look forward to many years of fruitful cooperation.



Dr. Mary Jo Lynch, Director,  
Carleton International, Ottawa,  
Canada

## メアリー ジョー リンチ氏 国際交流部長



### カールトン大学

1942年創立。世界的に著名な教授陣が揃い、特に工学、経営学においてはトップレベルを誇る。100カ国以上から留学生を受け入れている国際色豊かな大学で、カナダの首都オタワに緑豊かで広大なキャンパスを持つ。

本学とは2001年に交流協定が締結。

カールトン大学の国際交流責任者から熊本学園大学へのメッセージ：

国際主義は、何世紀にもわたり、世界の大学の欠くことのできない伝統の一部となってきた。世界史上、大学の研究者達は、国境や文化、時間を超えて、学者仲間達と知識や発見を共有しながら、アイデアの交換を活発にやってきた。

しかし、今日では国際主義という大学の長年の伝統は、学問の先駆者達を驚愕させるような様相を帯びてきた。ITの革命的な進歩、知識の爆発的増加、世界化した経済、そして現在及び次世代が直面している課題の多くは協調と協同をもって解決に当たるのが最善の策であるという理解の高まりは、大学をかつてないほど相互に交流を持つように、また世界的共同体の市民に関わりを持つように啓発しつつある。

これらの理由から、カールトン大学は熊本学園大学との相互交流を特に誇りに思っている。3年前の始まりから、この交流は私共の学生達に非常に素晴らしい経験をもたらしてくれている。同様に、受け入れる側としても、ここカールトンで過去に、また現在勉強中の熊本からの能力の高い留学生たちに、私達は大いに感銘を受けている。昨年、熊本からの訪問団をお迎えしたのは、私共にとって大きな喜びであり、またの来訪を心待ちにしている。

私たちは、熊本学園の友人の皆さんに心より敬意を表すると共に、今後の末永い有益な交流を期待している。

# 国際交流会館紹介



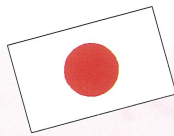
玄関（1F）：【会館入口の事務室窓口】  
優しくて寮に住んでいる留学生の第二のお父さんのような人は、寺田さんという寮の職員です。どんな時も、どんなに困ることがあっても、寺田さんと呼んだらすぐ助けてくれます。寺田さん、ありがとう！



キッチン（1F）：  
【本格的な広いスペースの業務用キッチン】  
大きくて、設備のいいキッチンのおかげで、留学生たちはいつも栄養に満ちて勉強したり暮らしたりしています。一人分でも、何十人分のようなパーティーでも、ここで作れば美味しい料理ができます。



洗濯室（2F）：  
【ゆったりとしたスペースの洗濯室】  
洗濯室には5台の洗濯機（無料）と3台の乾燥機（30分100円）があります。平日より週末はいつも混んでいます。早めに行かないとずっと待たなければなりません。



## ロイさんの 国際交流



### 熊本学園大学国際交流会館

学園創立50周年記念事業の一環で、留学生寮として1998年1月に完成。キャンパスから徒歩5分程度の場所にあり、鉄筋コンクリート造り地上4階建て。1階には事務室、ロビー、キッチン、OA室、集会室、和室が設けられ、事務室には24時間体制で職員が常駐している。

32室の各部屋には、ベッド、学習机、ロッカー、電話、エアコンが、リビングにはミニキッチン、冷蔵庫、テレビ、掃除機が装備されている。会館全体にはもちろんであるが、特に2階には「バリアフリー」の個室とリビングが完備され、車椅子の留学生がヘルパーと共に滞在していたこともある。

国際交流会館に同居することで、留学生間の輪が広まっただけでなく、留学生と本学学生の交流がより活発になった。

平成16年12月現在 9ヵ国25名の学生達が入居している。



### OA室（1F）：

【パソコンとプリンターを設置。自分のノートパソコンも接続可】

日本から母国までつながる手段はこの部屋にあります。24時間オンラインですので、日本といくら時差が違う国でも、留学生はいつでも情報を収集することができ、とても助かりました。



# 会館レポート



ロイさんのお出かけ風景  
(国際交流会館正面)

## ロイさんの紹介

グエン・ティ・ミン・ロイさんは、2003年度にベトナム国家大学ハノイ校からの交換留学生として1年間、本学で勉強していました。趣味は釣りで、誰からも好かれる明るい性格の学生さんでした。国際交流会館の紹介、ありがとう！



## 個室 (2F~4F):

【2Fから4Fに合計32室】

305号室は私の大好きな部屋です。南向きなので、夏は涼しくて、冬は暖かく、1年間ここに住んでいたのに一回も風邪をひいたことはなかったです。お蔭様で！



## ルームメイト:

【3人で1つのリビング、洗面所、トイレ、シャワールームを共有】

可愛くて優しいルームメイトの韓国人のチンミちゃんのおかげで、私にとって1年間の留学生活は大変有意義なものになりました。心から感謝しています。

(一緒に歯磨くのはチンミちゃんとの一つの習慣です。)



## リビングのキッチン:

【小さな電気コンロと流し台】

学生の Save Money には、リビングルームの小さい台所が本当に助かりました。自分が作った食べ物だから、いつも美味しく頑張って食べ切れました。



## リビング:

【テレビ・エアコン、机、テーブルが設置】  
ここで毎日皆と一緒に学生の義務を負っています。頑張りましょう。

## 熊本学園大での二年半

商学部 商学科 朴 光明

光陰矢のごとし、日本に来てアッという間に四年半が経ちました。この四年半を振り返ってみると、一言でいえば、充実した日々を送ったといえるでしょう。

熊本学園大に来る前に、東京で二年間日本語学校に通って、進学で熊本にやってきました。熊本にくるのは、従兄の勧めでした。熊本は大自然に恵まれた綺麗な町であり、また、学園大は綺麗なキャンパスがあり、たくさんの優秀な先生がいらっしゃるという聞いて、熊本に行こうと決めました。

学園大に入って二年半の間、たくさんの優秀な先生と出会って、いろいろ教えていただいて、自分の視野と知識が広がったと思います。特に今年は、夏休みを利用して、大学が企画したインターンシップに参加しました。インターンシップという制度があるのを知ったのは一年生の時でした。あの時から必ず参加しようと心に決めていました。今年、事前研修を受けて、8月23日から27日まで5日間野村証券で研修させていただきました。

インターンシップに参加しようと思った主な理由は日本の企業で実際に働きたいという願望もあったし、また、証券市場についてもともと興味があって、これまで、証券論の講義を受講したり、ゼミでも、証券市場について勉強して

いました。大学で勉強したことをこのチャンスでいかして、体験してみたいと思いました。野村証券は日本を代表する証券会社として、資本市場を通じて、個人投資家をはじめ、様々な企業に、資産運用・資金調達などのサービスを提供しています。熊本の野村証券は支店であり、主な業務は委託売買であります。現在、中国にも進出しており、北京と上海にも支店をもっております。証券業は私が目指す道ですので、私は野村証券を実習先として選びました。

この一週間の研修を通じて、大学で勉強した知識がすごく重要だと思いました。また、社会人になっても、常に知識を吸収しなければならないと思いました。なぜなら、この世の中は常に発展していくので、いろんなニーズに対応しなければならないからであり、また、現代の社会は情報化の社会だから、お客様も自分でインターネットを通じて、情報収集ができますので、自分の仕事を順序よく行うために、常に情報収集をしなければならないと思いました。

研修の一週間、野村証券の皆様には、お忙しい中、丁寧に店内業務と店頭業務について説明していただいて、本当に心から感謝しております。今回の貴重な体験は必ず私の将来に役に立つと思いました。



水前寺公園での花見

## 古くからの夢の実現

金 暲 珍 キム キョンジン

【2003年9月～2004年2月アメリカ・キャロル大学交換留学生】

오랜 꿈의 현실

제일교포 이었던 삼촌 덕에 어릴적부터 일본인 외숙모와 사촌형들을 접해온 나에게 일본이란 나라는 다른 사람과는 다른 흥미를 갖게 됐다. 그때 접했던 의사소통의 문제로 일본어와 일본문화를 공부하고 싶은 욕망을 갖게 됐지만, 대학졸업이 가까워 오면서 좀처럼 일본에 대한 공부를 할 수 있는 기회를 찾지 못한 나에게 구마모토학원대학은 그 마지막 기회를 실현시켜준 학교였다.

미국 몬타나주에 있는 케틀대학을 다니고 졸업한 나는, 대학시절 당시에도 좀 낫 구마모토학원대학 관련 프로그램과 교환학생 들을 접하곤 했다. 케틀대학을 다닐 적에도 한국에서 온 유학생이란 신분 때문에 학업도중에 교환유학을 한다는 것은 조금 무리였다. 당시 나는 군 문제 때문에 3년 정도를 휴학했던 터라 더 이상 졸업을 늦출 수는 없었다. 2003년 5월 컴퓨터공학학 학사학위를 받고 케틀대학을 졸업한 나는 졸업 후는 불가능해 보였던 교환유학의 꿈을 케틀의 구마모토학원대학에 개설 국제교류실 직원분들의 노력덕분에 교환유학이란 신분으로 구마모토학원대학에 입학 할 수 있는 자금이 주어졌다. 드디어 일본어를 공부할 수 있다는 생각에 나는 좀처럼 참을 이룰 수 없는 밤을 지새곤 했다.

구마모토에 도착한 때는 2003년 9월. 아직 한참 뜨거운 햇볕이 내리쬐는 한 여름이었다. 후쿠오카 공항에 도착했을 때부터 나는 일본의 모든것에 하나하나 눈을 땄 수 없을 정도로 바쁜 첫 일본어강습 시작됐다. 새로운 학기를 시작하니 교환유학생들을 위한 세심한 오리엔테이션, 보다 높은 교육효과를 위한 replacement 시험, 그리고 그 결과를 바탕으로 짜여진 일본어수업은 내가 일본어와 문화를 공부할 수 있는 최상의 조건을 제공해 주었다. 수업시간에 만난 선생님들은 영어권 학생을 가르치기엔 최적의 교사들요만 짜여진 그야말로 최고의 선생님들이었다. 철저적인 일본어교육은 처음엔 나로서는 딱히 들어맞지 않는 문법이나 없는 정도로 세심하고, 철저한 수업준비를 바탕으로 수업을 진행해 나가시는 분들이었다. 그 밑에서 공부한 나는 일본에 온지 단 3개월 만에 일본어능력시험 2급 합격이라는 커다란 꿈을 이룰 수 있었다. 일본어공부 뿐만이 아니고 국제교류실에서 제공하는 다양한 교외 활동은 일본문화를 교실이 아닌 직접 몸으로 체험할 수 있는 기회를 제공해 줌으로써, 우리 교환유학생에게 더 할 나위 없는 소중한 시간을 갖게 하였다.

이제 이곳 구마모토에 온지도 6개월이 지났고, 나의 교환학생 생활은 점점 막을 내리려는 이 시점에서 짧지만 다양한 경험을 하게해준 구마모토학원대학 임직원 여러분들에게 무한한 감사 드리고, 이 교환유학 생활을 더욱 유익하게 만들어준 미국 교환유학생들에게도 감사하다는 말씀 드리고 싶다.

在日韓国人である伯父さんと日本人である伯母や従兄弟達のおかげで、私には日本という国は他の韓国人とは全く違う興味を持たせてくれました。その時感じたコミュニケーションの問題で日本語と日本文化の勉強をしたいという希望を持っていましたが、アメリカの大学でなかなか日本語を勉強する機会を見つけられなかった私にとって、熊本学園大学は私の希望を実現してくれた最後の学校です。

アメリカのモンタナ州にあるキャロル大学で、私は、熊本学園大学関連プログラムや交換留学生達と接しました。キャロル大学在学中、韓国からの留学生だった私は、軍隊のため3年ほど休学したので早く卒業に必要な単位を取らなければなりません。2003年5月コンピュータ工学部を卒業するのに必要な単位を取り終えた私に、それまで不可能だと思っていた交換留学の夢がキャロル大学と熊本学園大学のおかげでかなえられました。ついに日本語を勉強できると思うと、眠れない日々が続きました。

私が熊本に到着した9月は死ぬほど暑い日々

が続いた夏でした。そんな暑い天気にもかかわらず、大きい笑顔で私を歓迎してくれた国際交流センターの方達と国際交流会館の寺田さんが、私には最初の日本の印象でした。1年間、または短くても6ヶ月間の為に来た私たち交換留学生のためのきめ細かなオリエンテーション、私達の日本語能力を確実に測定する為のプレイスメントテスト、そしてその結果をもとに構成された授業は何よりも日本語を初めて勉強する私には最高でした。学期途中で時々行われたフィールドトリップは日本文化および熊本の大自然を探検することが出来た一番幸せな時間でした。

こんなに色々な事を実現してくれた国際交流センターの担当の方達および日本語の先生のおかげで、私は半年で日本語能力試験2級に合格することができました。私にとって熊本学園大学にいた間は、私の夢がかなえられた宝物のような貴重な人生の一ページでした。ここで交換留学を終えるにあたって言いたい一言は、「皆さん、本当にありがとうございます！いつかどこかで会えると私は信じています。その時までお元気で」。



学生自治会とのスポーツ交流会にてチームメートと

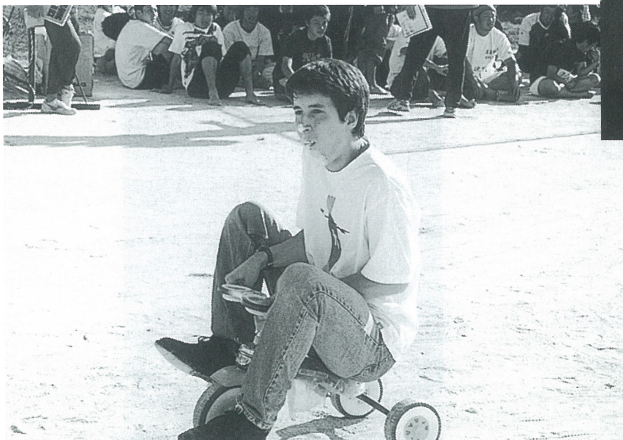
## “Kumamoto Life, eh?”

Mark Crosby マーク クロスビー

【2003年9月～2004年7月カナダ・セント・メアリーズ大学交換留学生】

While I was in Kumamoto, I experienced the real Japanese life and culture for the first time. Mind you, I have been to Japan twice before but at those times I retained my Western culture, ideas and mindset. What we learn about in class about Japan is one thing, as is observing Japanese people from a Western point of view. However, when you really get into the life and see the differences and feel them in yourself, it is what I learned in Kumamoto.

My time spent in Kumamoto wasn't the clichéd “best time in my life” but it was one that has definitely left a lasting impression on my life. If I could go back to it, 絶対行きたい!



体育祭障害物競争

熊本にいる時、日本の本当の生活と文化を初めて経験しました。前に二回も日本に行きましたが、その時欧米的な考え方をしてしまいました。授業中に、日本について習いましたが、実際に自分が経験したのとは全く違いました。異文化を理解するために行動の違いを感じられなければならないと思います。

私の熊本時代は言わば、“人生で一番の経験”ではないが、その経験は本当に私の人生に影響しました。もし帰れるならば、of course I would return!



学生自治会とのスポーツ交流会（筆者は後列左から3人目）

# Exchange Program Report

Rebecca Lee レベッカ リー

【2003年9月～2004年2月オーストラリア・ラトロープ大学交換留学生】

Defying my expectations in many ways, I subsequently learnt from my own experience in Japan that no amount of preparation is adequate to protect a person from inevitable culture shock.

An example of confusion caused by said nuances was my injured and bewildered reaction when under the impression that a newly formed acquaintance had gestured for me to leave. I didn't realize that this person was gesturing for me to approach, for the reason that the same gesture translates as, 'Shoo! Go away!' in Australia. I had not previously considered that the phrase 'language barrier' could encompass not just verbal language, but inclusively body language.

The entire time I have spent in Japan was so enjoyable that I feel as if I have been on a long holiday — a challenging holiday.

Field trips organized by the International Office at KGU were undoubtedly the highlights of my stay in Japan. The staff organized numerous trips enabling us to see and be involved in many aspects of Japanese culture.

In general, I also found that Japanese people, as a whole, are warm and friendly people who encourage visitors to see and enjoy as much of Japanese culture as possible. This hospitality was generously extended also to my family when they came to visit me in Japan, and in fact, my younger brother was given a place to stay on more than one occasion.

This along with other reasons confirmed my decision to return to Japan for work on completion of my degree at La Trobe University. A return visit would provide me with an opportunity to fulfill some of the many things which I would still like to do in Japan. In the meantime, as one of the first two exchange students from La Trobe University to attend KGU, I will encourage others to take part in the program and become more actively involved in the welcoming of visiting exchange students to my home university. I look forward to returning the kind hospitality of which was shown to me when I myself was an exchange student at KGU, Japan.

予想に反し、私は日本での自分自身の経験から、どれだけ事前に準備をしていたとしてもカルチャーショックを避けることができないことを学びました。

例えば、知り合いになったばかりの人から、あっちへ行けというジェスチャーをされて、私は傷つき、そして混乱してしまったことがあります。まさかオーストラリアで「こら、あっちへ行け!」というジェスチャーが、こちらへおいでという意味で使われていたとは思ってもよらなかったのです。私は、「言葉の壁」というものが、口から発せられる言葉だけでなくボディランゲージまで含まれるということを経験したこともありませんでした。

私が日本で過ごした全ての時間は、まるで長い、そしてチャレンジの休暇であったような大変楽しいものでした。

熊本学園大学の国際交流センターが企画してくれたフィールドトリップは、間違いなく私の日本滞在中におけるハイライトでした。スタッフは、私達が日本文化を色々な角度から見たり体験したりできるような多くの企画を立ててくれました。

また、一般的に、外国人が日本文化をできるだけ多く見て楽しめるように働きかけてくれる日本人全体が、温かく親切であることも分かりました。このもてなしの精神は、日本に家族が私を訪ねてきたときにも発揮され、事実、私の弟にいたっては何度か滞在場所を提供してもらったこともあります。

こういった様々な理由で、私はラトロープ大学を卒業したら日本で働きたいと決意することになりました。再度の来日は、私が是非日本で体験したいと思っている多くの様々なことを実行する機会となるでしょう。

一方、ラトロープ大学から熊本学園大学への最初の交換留学生の一人として、他の学生達にこの交換プログラムに参加し、また私達の大学で交換留学生を歓迎することにもっと積極的になるよう、働きかけたいと思います。私自身が熊本学園大学の交換留学生であったときに受けた温かいもてなしのお返しができることを楽しみにしています。



「交換留学生とのタペ」(後列中央)

## 20代の人生の宝

崔 珍 美 チェ チンミ

【2003年4月～2004年2月韓国・大田大学校交換留学生】

「夢のような留学生活。。。。これから日本での留学生活が始まるんだ。」と大きな抱負を持っていた私は、初めての留学生活を楽しみにしていましたが、最初、日本の生活はなかなか慣れませんでした。韓国を離れて日本の空港に着いた時から通じない日本語で気が気でなかったです。しかし、私は日本や日本人、日本文化に興味を持っていたので、すぐ日本の生活に慣れるようになりました。90分間、日本語で続けられる授業にも慣れることが出来たし、気が置けない友達もたくさん出来ました。また、生きている日本語や日本文化に身をもって直接に体験することも出来て、本当に嬉しいと思います。

私は熊本で留学をしながら色々なことを感じました。1年間留学をしながら感じたことの中で一つ目は国によって人を判断しようとした私を反省することでした。日本に来る前までは、日本人であれ、他の国の人であれ、国によって色々な偏見を持っていました。それが、留学をする時や様々な人達に会う時、自分にどのぐらい差し支えるかを実感しました。そして、色々な人達に会って、今までの私は本当に狭い考え方で生きていたことがわかりました。この世の中には、私よりもっと頑張っている人がたくさんいるのを感じて、わが身を省みることも出来ました。

私は国際交流会館(寮)という所に住んでいました。今まで、私は一人で住んだことがなかったのですが、何でも一人でしなければならぬ生活に慣れなくて大変でしたが、ここで出会ったベトナム、中国、欧米などの友達のおかげで、毎日楽しい日々を過ごすことが出来ました。初めは、そんなに仲良くなれるとは思わなかったのですが、お互いに心を開いて、悲しい時や嬉しい時に私の側にいてくれたり、相談に乗ってくれたりして、今は親友と言えるほど親しくなりました。今の時代は、人と人との触れ合いがだんだん少なくなって、「情」と言うのも希薄になっていくのです。このような世の中で、国という壁を越えて友達になったのは素晴らしいことではないでしょうか。二つ目は、大学で日本人の学生に会って感じたことです。熊本学園大学で日本人と一緒に授業を受けながら色々な話をしました。私が日本に来て一番驚いたことは日本人の大学生が皆、バイトをしていることでした。これはただ私が出会った友達のみならず、日本全国の大学生に通じると思います。しかし、韓国の大学生は日本の大学生と比べると全く違います。韓国では、大学まで両親から学費を払ってもらって、ほとんどの学生たちは小遣いさえももらって生活をしています。これが当たり前だと思っていた私は、自分がバイトをして学費を払って、何にでも自分が稼いだお金を使う姿に驚きを禁じえませんでした。

友達に「両親からは少しでもお金もらわないの。」と聞いた時、「もらわないよ。もう成人だから両親からお金をもらう時期ではないよ。」と答えた友達を見て私は恥ずかしくてたまりませんでした。今まで、私は本当に甘えん坊であったのを感じました。日本の大学生と韓国の大学生の考え方が全く違うのもわかりました。また、日本人の節約精神や親切さは私に大きな影響を与えてくれました。

昔は、そうではありましたが、今は留学をする人も多いし、誰でも留学しやすい社会になりました。しかし、留学をしてどのくらい自分が成長できるかは自分なりの努力によって決定されると思います。

私は、1年間の短い時間でどのくらい成長したかは分かりませんが、日本で、また熊本で留学をして幸せでした。特に、自然に恵まれている熊本で勉強することが出来て、国際交流会館(寮)に住んで様々な国の友達が出来て、素敵な留学生活を過ごしました。日本にいた間、あちこち旅行をしました。日本の代表都市の東京より人も優しく住みやすい熊本が気に入りました。熊本で日本ならではの趣をたくさん感じました。日本で留学することは私の20代の人生で一番最高の思い出です。これは、いくらお金がたくさんあっても、代えられない大切な宝です。

今、これを書きながら、私の部屋の窓から空を見ていますが、きれいな星がきらきらと瞬いています。その星を見ながら、1年間の留学生活を振り返ると色々なことが頭の中に浮かびます。

最後に、成功的な留学生活をすることが出来るように助けて下さった熊本学園大学の先生方や日本人の友達、国際交流センターの皆様、また寮で一緒に住みながらいい思い出を作ってくれた様々な国の友達に心から感謝しております。ありがとうございました!!!!!!熊本が大好きです!!!!!!



熊本市で行われた成人式にて

## 忘れられない一年間の留学

Glawgitigul Phruddtipan クラウキチクル プフルッチパン

【2003年10月～2004年8月タイ・チュラロンコーン大学交換留学生】

こんにちは皆さん。私はプフルッチパンです。私の名前は長いから、ギフトと呼んでください。これは私のニックネームです。タイ人の名前はほとんどが長いので、タイ人はニックネームを使います。私はタイから来ました。熊本学園大学で留学生になってとても楽しかったです。タイから熊本学園大学へのはじめての留学生になり光栄です。一年間でいろいろな面白いことに会いました。来たときに私に一番聞かれたのは、どうして日本に来ましたかという質問です。理由は、熊本には旅行できる所がたくさんあるし、景色がいいし、九州の中心にあり、空気がいいし、私は来たかったです。

最初は一人で熊本に来て心配でした。タイ人は一人だから、タイ語を話せません。熊本と私の町、バンコクでは生活が違います。来たばかりの時は、複雑でした。バンコクで私は毎日バスと電車を使っていましたが、ここでは自分の自転車を持って、毎日乗りました。ですから、私はいつも自転車に乗って、いろいろな所へ行きました。水も、ここでは水道から飲みます。便利だと思います。

私は留学生の寮に住んでとてもよかったと思いました。朝起きてきれいな山を見て、気持ちが爽やかでした。ここでは色々な国からの友達がたくさんできました。問題があった時、友達と相談できました。テストがある前に一緒に勉強して、分からないことがあっても話し合っただけで分かりました。寮ではよくパーティがあったの

で、一緒に留学生や日本人と遊んで、たのしかったです。留学生の友達と日本人の友達はとても親切です。文化が違うから、私にいろいろなことを教えてくれました。

それに授業が面白かったです。特に日本語授業では、先生が私に日本語をわかりやすく教えてくれました。他の授業にも出られて、知識を得られたたくさん友達もできました。大学で私は弓道部で日本の武道を習いました。とても面白かったです。

熊本にはたくさん面白い所、熊本城や阿蘇山や天草などがあるから、私は大好きです。国際交流センターの人はいつも留学生のために旅行の企画をたててくれて、私はよく国際交流センターに行きました。楽しかったです。旅行とホームステイが私の趣味だから、こういったことがあると、うれしいです。日本で私はたくさん時間があったから、たくさん旅行できました。それに私は電車や新幹線や船や飛行機を使うチャンスがあったので、たくさん経験ができました。旅行するとき、私は色々な所へ行って、親切な日本人の家族のところ泊まって、いろいろなところ、いろいろな生活を見て、いろいろな日本の文化や日本の生活や日本語などを学びました。

この年はいっぱい新しい経験ができました。この一年間は忘れられません。先生や国際交流センターの人や友達、ありがとうございました。



他の留学生仲間にお誕生日を祝ってもらっているところ（筆者は前列右から3人目）

## Model United Nation Club

商学部 経営学科 桑本 理多可

【2003年8月～2004年6月アメリカ・ウィスコンシン大学オークレア校へ派遣】

シカゴに安い料金で行きたい！それが最初にこのクラブ、Model United Nation Club (MUN) に入ったきっかけでした。今思うととてもいい加減な動機ではありましたが、いい体験ができてよかったと思っています。オークレアでの留学生活が1ヶ月と少しばかり過ぎたところに、仲のよかった韓国人の友達に紹介されたのがブラジル人の Julia だったのですが、ある日、私と Julia が話しているときに私が、「今度シカゴに学校の主催の旅行で行くんだ。」と言うと、彼女が「Masa も MUN に入っていたんだ！」と一言。何のことか分からずに、話をよく聞いてみると、政治や国連の仕事に興味のある学生たちが全米中から集まって、年に1回シカゴの有名ホテル（毎年変わる）の会議室を貸切り、約4日間にわたり模擬ではありますが、国連とまったく同じように議論等を行うと言うのです。しかも、ホテル代込みでなんと、45ドル!! もともと、政治などに興味があった私は即決で、クラブへ入ることを決め、conference までの数週間、毎週木曜日授業が終わってクラブの活動に参加していました。その間に仲良くしていたもう一人の韓国人の友人がクラブに入り、中国人の友人と留学生が増えていき、とうとう出発当日を迎えました。ところがまさかの寝坊!! 友人の電話で起こされ慌てて支度をして寮の一階に直行、当たり前ですが既に皆揃っていて、日程の確認を終わっていました…。この先大丈夫か不安になりながらも、車に便乗していざシカゴへ、約6時間の長旅でしたが、私は友人達と車内で熟睡! 途中の町でシカゴ市内は駐車料金が高いと言うことで、電車に乗り換えシカゴ市内へ、駅からはタクシーでホテルへ、着いてみると既にたくさんの方が、チェックインを済ませ、スーツに着替えて開会式へ直行。この時ほどスーツを日本から持って来てよかったと思ったことはありませんでした。開会式の行われる部屋に着くとここでもたくさんの人、おまけにマスコミ等も大勢来ています。開会式では元国連職員（友人談）の方々の話を聞き、その後おのおの担当の分野に別れ、conference のスタート。私は Julia とパナマの経済担当、所定の会議室に到着して、議論が始まったのですが、学生たちの意見が飛びかい、Julia も負けずに発言を行ったり、諸外国と意

見の足並みをそろえるために、会議の休憩時間（議題が変わるごとに、この休憩は取られていた）ごとに意見交換、私は17歳の行動力に終始圧倒されていました。正直私は、この時の英語はとても早く、また難しかったため、あまり理解できていなかったと言うのが本音でした。私よりも英語が理解できる韓国人の友人でさえ、たまに分からなくなると言っていたほどだったので、無理はないかと納得していました。この conference は朝の9時ごろから、夜の10時まで毎日続けました。この時 conference で実感したのは、多くの学生がとても盛んに意見を交わしてはいましたが、その中でもやはり数名他の学生たちよりも、発言も多くまた、人を多くひきつける、そういった学生たちがいたことです。驚く事にその学生たちのほとんどが同じ大学で、韓国人の友人とともに、「彼らはきっと有名な政治家になると思うから、名前を覚えておこう。」とっていました。そんなこんなで、あつという間に最終日、なんと最終日は MUN 主催のダンスパーティーが行われ、友人たちと行ってきましたが、アメリカ人がどれだけダンスが好きかよく分かりました…。そんなこんなで、あつという間ではありましたが、シカゴの旅は終わりまた6時間の長旅、もちろん帰りも私は熟睡!! 日本ではサークルにも所属していない私が、アメリカのしかも模擬国連クラブと言う、非常に興味深いクラブに所属できたことは、とても貴重な体験になりました、本当にクラブを紹介してくれた、友人の Julia、一緒に難しい英語に苦戦した韓国人の友人 Min には感謝しています。



模擬国連クラブのメンバーとシカゴのホテルにて  
(筆者は右端)



## 国際人として大切なこと

外国語学部 英米学科 渡邊 衣美

【2003年9月～2004年6月イギリス・リバプールジョンモーズ大学へ派遣】

私は2003年9月から2004年の6月までの約10ヶ月間をイギリスのリバプールで過ごしました。私の留学生生活を振り返ると、最初は何もかもがうまくいかず、毎日がストレスの連続でした。それも留学の半分か過ぎた頃には、ずいぶん生活にも慣れ、友達もでき楽しい毎日を過ごすことができるようになりました。その生活の中で、私は今の自分に何が欠けているのかについて深く考えることができました。その一つに、日本と世界との関係についての知識が欠けていたと思えます。

リバプールはイギリスで最も古いチャイナタウンがあることで有名で、中国人の友達の話ではリバプールには800人もの中国人が生活しているということです。それで必然的に中国人と知り合う機会が多くなり、何人もの友人ができました。しかし普段はどんなにうまくいっても、歴史の話になると急にとげとげしくなっており、「日本人が何を考えてるのか分からん。」と言われたりすることもありました。その時は何も言い返すことができず、ただただ言われるがままになってしまう事が情けなくて悔しくてたまりませんでした。

また留学中のこの機会を利用して、いくつかのヨーロッパの国々をまわることができたのですが、その経験も私に数々の問題を投げかけてくれました。オランダに旅行したときのことで、誰もが優しく英語が流暢で、美しい町並みにも感動して“I love Amsterdam!”と言ってみんなではしゃいでいたけれど、あの国は第二次世界大戦以降、反日感情を持っている国であった事、71年昭和天皇がオランダを訪問した折、暴動が起きたことさえあった事など全く知らずにただはしゃいでいるだけでした。しかし一度おばあちゃんに道を尋ねたときには、嫌な顔一つせず快く教えてくれました。今、彼女は

あの戦争の時代、反日感情の強かった時代に生きていただろうにと思うと、申し訳のない気持ちになります。

これらの気持ちは自分の民族を恥じたのではなく、自分の無知を恥じたからです。私は高校時代、世界史を取っていたので世界の歴史については明るかったはずですが、歴史はただの学問ではなく、その時代に生きていた人たちの血の通った事実であること、そしてその事実は現代に生き続け、人々の心に刻み付けられていることに今更のように思い知らされました。私たちが、様々な歴史的背景を持った様々な民族と将来的に良い関係を築いていくためには、まず自国の歴史や国民性について深く知り、その上で相手との関係のあり方を確立すべきだと感じました。私が留学している間に、熊本にも随分と外国人を見かける機会が多くなったように思います。それに伴い外国人との個人単位での付き合いが多くなっていくでしょう。これから先、在日外国人や旅行先での現地の人々と、建設的な関係を築いていくために、しっかりした知識を持つこと、その上で自分の意見を持つことが誰にとっても必要となってくると、この留学を通じて認識させられました。



木曜の夜はCavern Club♡ Mersey Beatles!!  
(筆者は右)

## オーストラリア留学で学んだこと

社会福祉学部第二部 社会福祉学科 上田 梨世

【2003年3月～2004年2月オーストラリア・ラトロープ大学へ派遣】

オーストラリアの社会福祉を学びたいという希望を持って一年間留学しましたが、英語が不得意な私にとっては、最初、苦悩の日々でした。語学学校からスタートし、大学で社会福祉を学ぶチャンス無くし、それがとってもショックでした。悩んだ末、ボランティアまたは、大学教授と会って話を聞きながらオーストラリアの社会福祉を学ぼうと思い、ボランティア探しに励み、何度も教授のオフィスに足を運びました。ボランティアをするには、さまざまな書類を提出しなければならず、半年かかってやっと老人ホームと障害児が通う学校でボランティアをすることができました。そしてその一ヵ月後には農業のボランティアも始めました。ボランティアをやったおかげでたくさんの人と出会うことができました。一番印象に残っているのが老人ホームのデイサービスのボランティアです。オーストラリアは多国籍国家でさまざまなエスニックの人々が住んでいます。もちろん、老人ホームにもさまざまなエスニック高齢者の方がおられ、通訳の人もいました。私は、そのデイサービスで一人の男性に出会いました。彼は、56歳という若さにもかかわらず、脳梗塞になり、左半身が麻痺になり、彼が生きがいとして働いていた教師を辞めないといけなくなりました。彼は私にオーストラリア文化、彼のライフストーリー、英語を教えてくださいました。時には課題も手伝ってくれたのです。彼の母親は難民としてオーストラリアに入国し、必死で彼を育てたそうです。彼は私にたくさんのことを教えてくれて、利用者とボランティアの関係から教師と生徒の関係になりました。そのワーカーや彼の家族から「彼は、また教えることに生きがいを持ち、前に比べて生き生きとしてきた。ありがとう。」と言われました。それがオーストラリアで最初に役に立ったと実感した言葉でしたし、自信につながりました。彼は、今でも私の先生ですし、いつも私のことを支えています。デイサービスで学んだことが今では卒業論文のテーマに役に立っています。そして、分らないことがあったら、デイサービスで出

会った彼に聞き、彼は、パンフレットがあればすぐ送ってくれます。

人は、挑戦することで新たな人生が始まり、新しい自分を見つけ出せると思いました。そして、とにかく人見知りせず、積極的にいろんな人と話すことです。話を聞いて、いろんな生き方を学ぶことです。傾聴すれば、お互いがメリットにつながります。相手がオーストラリア人だったら、英語の勉強になりますし、難民として来られた方なら日本では聞けない話が聞けます。また、自分のやりたいことが見つかるかもしれません。傾聴し、その人を知り、受け入れることが大切だと思います。人は誰にでも受け入れられたら嬉しいです。そしてその新しい友達は今後、自分自身の人生で大きな支えになるかもしれません。支え合うのは、人種、年齢、言語は関係ありません、人は人なのです。大切なのはHeartだと思います。待っていても何も始まりません、プラス思考に自発的に行動することです。

私の留学は、苦勞して忍耐力もつきましたが、やはり日本では体験できなかった多文化社会での生活で、世界は一つだと分かったことです。そして皆同じ人間ということです。これは、オーストラリアに留学をしていなかったら、気づかなかったでしょう。日本にも今ではマイノリティーですが違う文化を持った方がいます。そういう方（特に高齢者の方）は社会から保障されているのでしょうか。今後、私自身の課題となり今、新たな人生が始まっています。



ボランティア先で出会ったジョンと

## 夢思い夢叶う!!

外国語学部 東アジア学科 大洞 時子

【2003年3月～2004年2月韓国・大田大学校へ派遣】

私が韓国に留学をしようと思ったのは、高校生の時に、一度諦めていた留学という夢を実現させたかったからです。学園大に入学して、大学の国際交流会館で1年間留学生と生活できるチャンスに恵まれ、ちょっとした留学気分を味わうことができました。いろんな国からの留学生や日本のルームメイト達に出会い、私も留学したい!私も絶対留学しよう!!と決意しました。今しなければ、きっといつか後悔する時がくるだろうと感じたからです。

私は、絵を描くことが大好きで、韓国でも時間がある時は絵を描いていました。行った直後から帰国直前まで何十枚か描きました。振り返って見てみると、3月行って間もない当初の絵は、線が薄く、色もほとんどありませんでした。初めての場所での生活で緊張や慣れないことの連続だったことが表れていたんだなあと思います。がしかし、時間が経つにつれ、環境にも慣れ始めてきたのでしょう、後の絵になると絵に力強さが出てきたりし、色も次第に濃くなっていきました。しかも、友達から「前より色が赤くなったね!!」と、言われた時には驚きました。私は、自分でも気づかぬ間に、韓国の人々の人情あふれる情熱的な部分や、キムチ・とうがらしの真っ赤な韓国色に染まっていたのだと思いました。それで、以前からかなり興味があったイラストレーションの授業を受けたことは、私にとってとても貴重な経験になりました。今まで知らなかった発想のしかたや表現方法を学ぶことができ、とても楽しい時間を過ごす事ができました。高校生の頃大学進学のほかには美術系の道も考えていた私にとって、今回の留学で絵やイラストを学ぶチャンスを得たことは、かなりの収穫でした。もちろん絵を描くと

きは、言葉は必要ではありません。しかし、毎回作品が仕上がる度に描いた絵について、どういった気持ちが込められているのか、何を表現したかったのか、なぜその材料を使って表現したのかなどを説明する時間がありました。うまく発音出来ないながら必死に説明している私の話を、クラスメイトのみんなは一生懸命聞き取ろうとしてくれました。一人一人感想を言ってくれた時はとても嬉しかったです。そして何よりも絵やイラストレーションなど同じ興味を持っている仲間に会えたことで、自分の夢や将来について、以前よりもっと真剣に考えるようにもなりました。「自分の作品展を開きたい」という思いを胸に帰国して、今年念願の『とことことこのてんらんかい』という初めての個展をすることができました。私は、留学を通して、語学力だけでなく自分の思いを表現する楽しさ、色んな国の友達に出会い地球上すべての人はみんなつながっていて一つであり、そして、夢はかならず叶い、チャンスは自分で作れるという大きな宝ものを得ることができました。これからは、大好きな梅干&キムチパワーで好きな絵を通して韓国、そして世界中の人達と交流していきたいです。



日本語学科の学芸会にて（筆者は左端）

## 留学をしてみても

外国語学部 東アジア学科 大川内 良太  
【2003年2月～2004年1月中国・北京外国語大学へ派遣】

私は2003年2月から2004年1月までの予定で北京外国語大学へ留学しておりました。ちょうどこの時期は中国をはじめとする世界各国で新型コロナウイルス(SARS ウイルス)が流行した事は皆さんの記憶に新しいものかと思います。SARSのため留学中は、一時帰国や授業の休講など、「にがい」経験もしました、しかしその限られた北京留学で私は多くの貴重な経験、体験をすることができました。

今回私にとって1ヶ月以上の海外での生活というのは初めての経験でした。日本を出発する前は、期待と不安が入り混じり、それでも不安の方が大きくそんな状況に戸惑いを強く感じていたことを覚えています。北京へ行くのが初めてではなかったということが、私の不安や戸惑いをまぎらわせてくれたのかもしれない。

実際北京で生活をしてみて、しばらくは今までとは異なった生活環境に自分を適応させるのに苦労しました。やがて大学での授業も始まり徐々に生活のリズムもつかむことができました。食生活にも慣れ中国語を日常として使い生活してゆくことにも慣れてきました。初めは中国語を話す時、一度頭の中で単語や文法・文章を組み立て、シミュレーションした後に、声に出して話していました。中国語も使ううちに徐々に慣れてきて、なんの不自由もなく会話できるようにまで成長しましたと思います。

一度帰国し、9月に再び北京へ戻ったのですが9月からは旅行に行く機会が多くなりました。今思えば、旅行中が私の中国語レベルを随分引き上げてくれたような気がします。授業で習った中国語、熊本学園大学で習った中国に関する知識、すべてをフルに使ったような気がします。確かに日常生活において中国語を使うことは当然なわけですが、しかしこのような非日常の中で使うことこそが、私の考える「実践」であり自分の語学力を成長させた、最も重要なことだと思いました。

授業とはいいまして、私は決して優秀な学生だったとは言えませんが出来る限り積極的に先生に質問したり、率先して中国語を喋るように

心がけていました。しかしどうしても日本人同士となると中国語ではなく日本語で会話をしてしまうことが多く、その点は大いに反省しなければなりません。そして、9月からの新学期では自分を高級班に入れていただき、授業が想像以上に難しく大変苦労しました。朝8時から昼までの授業を終えると、休みの日以外は毎日授業の予習・復習・宿題、そして卒業論文の執筆と、かなりハードな毎日でした。休みの日はよく旅行に行ったり、北京の街をブラブラ散策して過ごしていました。時には中国人の友人と一緒に食事したり、友人の家に泊まりに行ったりもして、充実した休日を送っていました。

今回私はSARSがなければ普通に留学できたのに、など思ってしまう時もありますがSARSがあったからこそ、時間の貴重さを感じる事が出来たし、何よりも普通の留学では経験できないことも経験できたのかもしれない。

私は今回の留学を非常に貴重な体験だと思っています。私にしか経験できなかった私の留学経験はこれからの人生の糧となるでしょう。私の考える普通の留学以上の成果を得ることができたと思います。改めて、私を留学させてくださった大学関係者の方々に御礼申し上げます。私はこれからも様々な経験を積み、さらに成長してこの留学の成果を存分に発揮していきたいと思っています。これからも感謝の気持ちを忘れずに。



4月、SARSの流行で人気のなくなった繁華街

# 交換留学生(熊本市派遣)体験記

## 濃く・深いサンアントニオ生活

外国語学部 英米学科 本田 美香

【2003年8月～2004年5月アメリカ・インカーネットワーク大学へ派遣】

私は熊本市派遣留学生として姉妹都市であるサンアントニオに留学しました。そこでの10ヶ月間の生活は、新鮮かつ冒険の毎日でした。

大学生活は、ELSを通して、韓国・台湾・メキシコ・イタリア・ドイツ・ブラジル・ニカラグアからの人達と出会うことができました。始めは「ニカラグア」と言うのが国だと言うことを知らず、友達の名前がニカラグアと思い、恥ずかしい思いをした事も…。ELSを通して、様々な国の人との交流により、彼らの言語・文化を知るいい機会でした。冬休みには、友達になったイタリア・ドイツ人の友人宅を訪れ、楽しく忘れられない時間を過ごすことができました。春semesterになると、大学の授業を受け、授業についていくのに必死になり、あっという間に時間が過ぎていきました。この時、ルームメイトのディードラが親身に手助けをしてくれ、本当に感謝しています。

休日などは、日本紹介を中心とした活動を行っている「日米協会 (JASSA)」でボランティアとしてイベントに参加していました。熊本市から派遣という事で、この協会の人たちと知り合うことができました。イベントでは、日本をより身近に知ってもらう為に、浴衣で参加したり、日本食紹介・子供たちに兜作りを教えたりなど、様々な活動を行いました。兜ができた後、嬉しそうに“Thank you”と言ってくれた子供たちの笑顔が今でも忘れられません。日米協会のイベントに参加でき、本当によかったと思います。

このようにたくさんの人に出会い・学び・助けられ、忘れられない一生の思い出ができました。またいつか、第二の故郷サンアントニオを訪れたいです。



ドイツ・ブラジルからの留学生と (筆者は中央)

## 桂林での生活

経済学部 国際経済学科 前田 麻美

【2003年9月～2004年7月中国・広西師範大学へ派遣】

私は中国の桂林に10ヶ月間留学しました。今、一番心に残っていることは、正月に桂林の友人の実家にホームステイさせてもらったことです。「私の家で一緒にお正月を過ごそう。」と言ってくれたパンリーの家族は、私を温かく迎え入れてくれました。実の子供のように接してくれ、彼女の親戚の家と一緒にまわったり、友達の結婚式にも出席させてもらいました。夜中まで日本語と中国語を教え合い、とても楽しい時間を過ごしました。彼女との出会いが私の留学を充実したものにしてくれたと思います。

後期からは、桂林の旅行会社の日本部で仕事の手伝いをさせてもらいました。日本のお客様にメールの返事を出したり、クレーム対応や、旅行案内の翻訳などをしました。職場の方に日本語について尋ねられることも多く、自分の母国語である日本語に対しても知らなかったことがあり、反省させられました。実際に中国の会社で働き、貴重な職場体験をすることができました。冬休みは上海、蘇州、杭州へ一人旅をし、5月には桂林市の職員の方に湖南省の張家界に連れて行ってもらいました。地域によって方言も人の性格も違うことを実感し、また、自然の雄大さに感動しました。学校では、クラスメートと中国語能力向上のため、互いに切磋琢磨しました。思ったように中国語が上達せず、焦った時期もありましたが、クラスメートとの交流のおかげで乗り切ることができました。

この留学で出会った人との交流を通し、自分自身成長できたと思います。今後もこの経験を生かし、色々なことに挑戦していきたいです。



お正月に親友の家族と (筆者は右から2人目)

# 短期派遣留学生体験記

## 語学以外にも多くの事を学んだ2ヶ月間

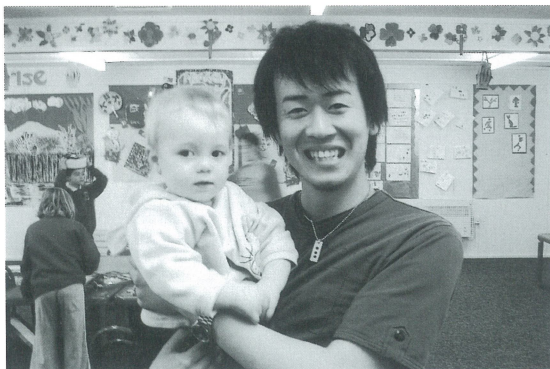
社会福祉学部 社会福祉学科 坂本 和徳  
【2004年2月～3月イギリス・リバプールジョンモーズ大学へ派遣】

今回、私は本場の福祉を学ぶことを目標に、短期派遣留学へ参加させていただきました。向こうでの生活は、慣れない土地での生活と、これまで聞いたことのない訛りの強い発音に大変苦労しましたが、毎日充実した日々を送ることができました。

講義では、他国の留学生と共に講義をうけることにより、発言力・質問の積極的な姿勢などを知り、刺激をうけ自分自身を見詰め直す良い機会となりました。そこで、フランスからの留学生 Greg と知り合い、一緒に食事に行ったり話しをしたりして楽しい時間を過ごすことができ、かけがえのない友人と出会うことができました。今でもよくメールで連絡を取り合い、今年の8月には熊本で再会しました。

また福祉については、ナーシングホームへ訪問し事前に作成したアンケートや建物内の見学をさせていただこうとトライしたのですが、うまく果たせませんでした。しかし、それだけでも私にとっては大変学ぶことが多かったように思います。それから、ボランティアの発祥地でもあるイギリスにおいて、学童保育のボランティアに参加しました。言葉が通じなくとも、それ以外の非言語的手段に用いて子どもたちと触れ合うことができる喜びを得ることができました。

この2ヶ月間は、自ら行動したことにより多くのことを経験し多くの人と出会えたことは、私にとって決して忘れることのできない良い思い出となりました。そして、語学以外にも多くのことを学ぶことができました。



ボランティアに参加して

## 新しい自分との出会い

外国語学部 英米学科 田川 容子  
【2004年2月～3月イギリス・アルスター大学へ派遣】

イギリスで2ヶ月間留学を経験して得たものは、今の私の心の宝物である。美しく広い海、山、歴史を感じさせる建物など恵まれた環境に住み、様々な人達との出会いの中で生活をした2ヶ月間。その2ヶ月間という期間は、限られた時間であったが様々なことが起き、そのたびに新しい発見と感動の連続だった。

アン先生との出会いは、人前で英語を話すということが苦手だった私を変え、可能性を与えてもらうことになった。「この機会に克服しきっと自信を得ることができるはずだから。」と励ましてもらい、あえて苦手な分野の授業に挑戦することを決め無事にやり遂げた時には、大きな達成感と自信が生まれていた。

他国からの留学生と一緒に受ける授業では、わからないことなどその場で手を挙げ意思表示をし、先生の問いかけにも積極的に反応し会話をしようとする学生が多いことなど、日本にいる時とは異なる雰囲気の中でとても刺激的だった。また、友達になった留学生たちと語り合い過ごした時間も、楽しく充実していた。

この国で外国人として暮らしていたホストマザーは私の良き相談相手だった。街で人種差別的な言葉をかけられたある日の夜にこらえきれずに突然泣いてしまった時、そして、大きなトラブルを抱え、辛くて考えがまとまらずにいた時も私の立場に立ち、彼女自身の体験をもとに慰めてくれた。私はそのたびに勇気付けられ、克服することができた。そして、今の心の迷いやアクシデントをいかに良い方向に転換できるかは自分の生き方次第だと信じ、無事に残りの留学生活を過ごすことができた。

この留学で自分の意思や目標を持ち前進し続けることの大切さを、人との触れ合いや支えの中で改めて実感した。言葉や生活の不自由さを感じない生活に慣れてしまい、安心して暮らしていた日本にいる時には気付かなかった大事なものを、言葉の壁や出会った困難、乗り越えなければならなかった壁を通して再認識することができた。

そして、留学に際し応援して下さいました方々に感謝しながらこれからの自分に生かしていきたい。



アメリカからの留学生と一緒に（筆者は左）

# 短期語学ホームステイプログラム体験記

## 短期語学ホームステイプログラムに参加して

経済学部 経済学科 池田 優

【2004年2月オーストラリア・ラトロープ大学へ派遣】

今年2月、私は短期語学ホームステイプログラムを利用して1ヶ月間オーストラリアに行くことができました。初めての留学ということで期待もありましたが、ただでさえ英語が苦手な私は普通の会話さえできるのか不安でした。しかし実際オーストラリアでの生活が始まるとホストファミリーはもちろん、どこに行っても伝えたいことを親切に聞いてくれてお互いの思いを理解することができました。私のホームステイ先には初めの一週間ほど韓国の留学生もいて一緒に学校に行ったり、お互いの辞書を片手にそれぞれの国のことやオーストラリアのことを話したり、家に帰ってからも色々なことを学ぶこともできました。今回の留学は1ヶ月という短期間とあって、私は英語を上達するというより違う国に生まれ育った人たちの生活や文化、また日本では見ることのできない自然のすごさなどを自分で見て体験したことが大きな経験になりました。のんびりした生活を送り、バスを30分ほど待つことは普通だったし、その間に知らないおばあちゃんと仲良くなったりできるなどたくさんのお会いもありました。そんな優しさのある人や親切な人たちと出会うことができ成長できたことはこの留学に参加したことに大きな意味があると思っています。この体験は忘れることなくずっと心に残り、今後の生活で生かされていくと思います。



プログラムの参加メンバーと  
(筆者は中列右から2人目)

## 大切な財産

商学部 商学科 遠藤 裕理

【2004年3月ニュージーランド・ユニテックへ派遣】

この度、短期ホームステイプログラム第一回参加者としてニュージーランドのユニテックに留学させて頂きました。三週間という短い間ではありましたが、体験したことや感じたことは、今も昨日のように蘇ってきます。ニュージーランドの生活で感じたことは言葉の壁でした。日本を発つ一ヶ月前、基本的な英会話を身につけて挑んだホームステイ。しかし伝えたい言葉が見つからず何度も何度も悔しい思いをしました。でもその経験が、自分自身を強くすることのきっかけになったのです。それは悔しい思いをする度に英語力に対する自分の未熟さが理解できたからでした。それでもホームステイの生活は大変充実しており、大学から出題される宿題を自分なりに努力したこと、初めて列車やバスに乗って街に行ったこと、クラスみんなでバーベキューをしたこと、放課後に韓国人の人達とバスケットをしたことなど私にとって大切な財産になりました。

三週間というあまりの短さに大変驚きました。学校ではもちろん英語のみを話して国籍の違う人たちと意思疎通を図らなければならず、苦勞しました。うまく話すことだけに集中してしまっ、人とのコミュニケーションが取れなかったように感じます。もう少し時間の余裕があれば少しは人との距離を縮めることが出来たかもしれないと思っています。このホームステイを次に生かした、あの時感じた悔しい思いを心に留めることが重要だと強く感じます。この留学が実現したのは多くの方々のおかげからです。矢澤さん、オリエンテーションを企画してくださった国際交流センターの皆様、並びに私の家族にこの場を借りて謝意を表させて頂きたいと思っています。本当にありがとうございました。



クラスメートと (筆者は中央ピースサイン)

## ホストファミリーを経験して

外国語学部 英米学科 加納 麻衣

現在我が国日本は、大変な韓国ブームである。それと同様に、我が家にも母を筆頭に韓国ブームが訪れている。そんな中、2004年5月、「韓国大田（テジョン）大学校夏期学生研修団のホストファミリー募集」という告知が張り出された。何気なく掲示板を見ていた私は、思わず足を止めた。なぜなら、韓国に興味を持ち始めていた私にとって、ホストファミリーを通して実際に韓国の留学生と交流出来るということは、絶好の機会だと感じたからである。もちろん家族は賛成し、ホストファミリーをする事が決定した。しかし、ホストファミリーをする事に何の抵抗もなかったわけではない。というのも実際、私は今まで英語圏の人と交流する機会が多く、英語圏以外の人との交流は初めてであった。そして、私自身ホームステイの経験はあるものの、逆に受け入れるというホストファミリーの経験がなかったからである。だが、そんな不安よりも私は好奇心の方が強かった。これが、私がホストファミリーをすることになったきっかけであるが、ここでは、ホストファミリーを経験して考えた事や気付いた事、学んだ事などを述べようと思う。

まず一つ目に、気付いた事として「異文化理解の大切さ」である。私は、外国語学部に所属しているということから、これまでも授業などで異文化理解については学び、触れてきた。しかし、今回ホストファミリーとなって、頭で異文化を理解しているのと、実際体験するのでは大きく違うものだと身をもって感じる事が出来た。その理由として、私は、受け入れ初日に早速異文化体験をしたからである。それは、彼女がいつもの習慣で膝を立てて食事をしている姿を見た時のことであった。日本では、膝を立てて食事をする事は下品だとされ、良く思われない態度の一つであるが、韓国では全く異なり、当たり前という事を初めて知ったのである。しかし、そこで文化の違いを知ったのだが、正直一目見た時の衝撃は大きいものであった。このように、今まで日本で育ってきた私は、どうしても日本の習慣や文化が正しいと思い込んでしまっている部分があったことを改めて気付かされた。少しの違いから大きな思い違いを生んでしまわないためにも、異文化を理解する事が大切であると私は身を持って感じた。

次に二つ目に、「学生の勉強に対する意欲の違い」について考えさせられた。ホストファミリーを経験して、この事を改めて考えさせられるということは、大変自分自身情けなく感じる。

私が受け入れた学生は、日本語を勉強する目的をきちんと持ち、将来を見据えて勉学に励んでいる姿さえ感じ取ることが出来た。また、他の学生達も同様に目的意識がはっきりしていたように思う。今の私は、授業一つ一つに目的意識を持って取り組んでいると胸を張って言える自信がないと感じ、他の国の学生と交流する事で自分自身を見つめ直すことが出来たと思う。

最後三つ目に、「相手を理解しようとする気持ちの大切さ」を学んだと思う。異文化交流をする上で、初めにぶち当たる壁は言葉である。韓国語を勉強したことのない私にとって、やはり不安の種は言葉であり、ホストファミリーをする中で何度も言葉の壁にぶつかった。しかし、いつの間にか言葉の壁を気にしなくなった自分がいたのである。恐らく、相手を分かりたいという気持ちが自然と芽生えていたからであろう。そして、私達は、顔の表情や身振り手振り、あらゆる手段を使ってお互いを理解しようとし、最後には、今まで長く一緒にいたかのようにお互いの事を分かり合うことが出来たのである。

以上のように、私は一泊二日という短いホストファミリー期間からも、こんなにたくさんの事を経験することが出来、普段の生活からは知ることの出来ない韓国の文化や風習など身を持って体験することが出来たのである。ホストファミリーをするきっかけは何気ないものであったが、得たものは大変大きく、素晴らしいものだったと感じる。今回ホストファミリーを経験して多くの事を考え、学んだ事をこれからの生活に活かしていきたいと思うと同時に、このような機会を与えて下さった国際交流センターの方々に感謝したいと思う。



韓国大田大学校のヨンジュと私の母（直子）とお別れショット（筆者は左）



## 映画のような町ミズーラ

経済学部 助教授 金 栄 緑

【2003年8月から1年間交換教員としてアメリカ・モンタナ大学へ派遣】

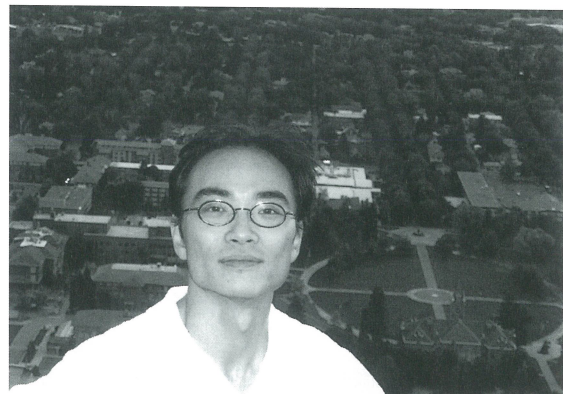
フライ・フィッシング (Fly fishing) を素材にしたロバート・レッドフォード監督の1992年作品「A River Runs Through It」という映画があります。この映画が撮影されたところと物語の背景となったのがアメリカ・モンタナ (Montana) 州のミズーラ (Missoula) であります。また、映画で主人公の弟を演じるブラッド・ピットは (主役かも知れないが)、モンタナ大学 (The University of Montana; UM) を卒業してモンタナの州都であるヘレナ (Helena) で新聞記者として働きます。20世紀初頭のモンタナの美しく雄大な自然を背景に、1つの家族の愛の記録を淡々と綴るこの映画は、刺激的で派手な内容ではないが心に残る美しい映画です。

2003年8月から私は、映画のように美しい町ミズーラにあるUMで交換教員として1年間過ごしました。ミズーラ市は人口5万7千人くらいの小都市で治安がよく、住民の9割以上が白人というアメリカではないような町ですが一番アメリカらしい町でもあります。天候は過ごしやすく、夏の平均は20度くらいで雨も少ない乾燥地域です。ミズーラはアスファルトの道路以外はすべて芝生と言っても過言ではないほどに芝を大事にします。スプリンクラーで芝生に水をやる光景は、まるで町全体が噴水ショーを演出しているように見るだけでも気持ちがよくなります。冬の平均気温は零下9度くらいですが雪が多く周りの山は春まで白色のままです。春は日本と同様で薄緑になり、秋は落ち葉で町全体が黄色のカーペットを敷いたようでそれもまたきれいです。

UMにはその自然の美しさに負けないくらい綺麗な物語を持っています。2001年亡くなったマンズフィールド (Mansfield) という人物がおります。モンタナのビュート (Butte) という鉱山都市で働いていた真面目な青年マンズフィールドをマウレン (Maureen) という人が勉強させてUMに入学させます。卒業後マンズフィールドは下院と上院議員になりアメリカの政治でマイナーリティグループのリーダーとして活躍します。その後日本の大使を長年勤めアメリカの東アジア政策に大きな影響を与えます。マンズフィールドは自分の財産で財団を

設立、UMに図書館を建てました。マンズフィールドは“マウレンは私の人生を変えてくれた方です。マウレンがなかったらマンズフィールドもないでしょう”と言いながら名前を呼ぶときには必ずマウレン・マイク・マンズフィールドと呼ぶようお願いしたそうです。それでUMにある立派な図書館の名前は「Maureen and Mike Mansfield Library」であります。図書館の前には二人の銅像があります。アメリカの大学にはこのような話が多く、ハーバード大学の図書館もタイタニックに乗って亡くなった息子 (H. E. Widner、ハーバード大学の卒業生) のために親が建てたという話は有名であります。もちろんハーバード大学の図書館の入り口にはこのようなことが刻んであります。

ミズーラはアメリカの他の大都市のようにぎやかさは無いかも知れませんが、親切で落ち着きがあります。英語の専門家ではないので詳しいことはわかりませんが地域のなまりもないようで英語を勉強するには最適な所であると思っています。UMで過ごしたこの1年間、アメリカの大学や社会、文化など良い勉強と経験ができ本当に良かったです。読者の皆さんも留学や研修などの機会があれば、ぜひミズーラに行ってみてください。



マウンテン・センチネルから。マウンテンMとも呼ばれるこの山は、大学のすぐ後ろにあり山の上には大きいMという文字があります。UMの学生はもちろんミズーラの人々に愛されている山です。登れば美しいミズーラの町とキャンパスが眺められます。

## 熊本の自然と人

大田大学校 朴 喜 南

【2003年3月から1年間交換教員として受入】

熊本ではほんとうに幸せな1年間だったと思う。家族と過ごした時間も多かったし、そばには阿蘇という大自然もあったからである。しかし、なによりも新しい経験ができるように手伝ってくれた多くの方々がいらっしゃったおかげであろう。

熊本には家族と一緒にあったもので、少し早めに熊本入りをした。そのおかげで春、夏、秋、冬の阿蘇の姿、変化を見ることができた。平素、山をあまり好んで行くことはなかったが、いろんな理由で、阿蘇には行くチャンスが多かった。雄大な阿蘇の姿、季節毎に変わるその自然の姿は決して私をあきさせることはなかった。むしろ行く度に阿蘇の魅力に惚れるようになった。熊本の市外を少し離れたら、遠くから現われる阿蘇、その魅力を感じながら、熊本での生活は自然の変化に対する胸のときめきと好奇心でもっと楽しくなった。

熊本での一番大事な人との出会いはやはり学生であった。しかし、学期が始まると日本での授業はすごく緊張を呼んできた。韓国では50分の講義であったとか、通年の科目であるとかと言う授業体系の変化と、姉妹大学の学生たちに、なおかつ日本語で講義をすることが負担にもなった。

4月15日、はじめての「韓国語」の時間。やはり、授業はやさしくはなかった。授業で印象的だったことは学生たちがあまり音を出そうとしてなかった事である。しかし、外国語授業の特性上、教材を読むとか、翻訳をするなど、音を出す必要がある部分においても、殆ど音が出ないので、これからの授業が心配になった。学園大学では正式に出席表が出るまでは出席カードを利用して出席を確認している。出席カードは使える余白があって、これを活用すれば、と思って、確認した結果、先生のなかでは出席カードを利用されている方がいるということである。それで、講義内容の中で分からなかったところや、要点などをカードに書くように受講生に要求した。

これはすごく満足な結果を得たと思う。カードには本当にいろんなことを書いてもらったし、これを根拠に学生と教授の間には授業に対する意思疎通が成立できたと思う。授業にカードを利用することに合わせて、授業のやり方も少し変えて、まず、カードの質問を説明してから、教材による授業を行った。教材も本文の内容を変え、授業の時間内に消化できる本文の量を黒

板に書いて、できるだけ、授業時間に理解するようにした。

講義方法の変化は毎回40%以上の学生から講義に対する評価とか質問があった。その内容も徐々に“講義内容が理解できた”という学生が増えたのである。

もちろん、授業で会った学生のなかには韓国語にすごい関心をもっていて、熱心に勉強する学生もたくさんいた。また出席カードに“今日の授業で良かった点”とか、“今日の内容は皆理解できたようだ”のように、韓国語講義を励んでくれた学生も多数いた。本当に有り難かったし、心強いパートナーになってくれた。韓国語講義はこのような学生らの助けがあったから可能だったと思う。

また、東アジア学科では韓国の伝統文化の中で、テーマを決め、日本文化との差を調査、韓国語で作文をした。調査では、教授と学生は活発で率直な意見交換が成り立ったと思う。

学生たちの韓国語作文は間違うところにおいては、繰り返して間違ったりしていたが、これは母国語（日本語）の干渉が影響を与えていることが多かった。しかし、このような問題点に対して適切な韓国語参考書がまだ、十分ではないように見えた。

他にも週に一回集まって、韓国事情と日本事情などに対して意見を取り交わした韓国留学の経験がある学生たち、韓国語授業の教職員皆さま、いつも家族のことを心配してくださった学園大学の皆さま、子供の先生、親しくして下さった近所のみなさま、皆元気で今度は韓国でまた会えることを楽しみにします。

ありがとうございました。



熊本学園大学キャンパスにて

## 人・人交流の歴史を感じながら

経済学部 教授 野間 重光

【2003年3月から1年間交換教員として韓国・大田大学校へ派遣】

筆者は2003年度の大田大学への交換教員として、1年間という貴重な韓国生活を送る機会を頂いた。韓国旅行そのものは数回経験していたし韓国人の知り合いもいたので、渡韓への不安は全く無かった。不安といえば韓国語という言葉の壁だけで、残念ながらこの壁は1年後も揺るがすことすらできなかったのだが。還暦を目前にしたこの非日常へのジャンプによって、心身両面で新しい何かを得たことは疑いない。キャンパス生活を中心に1年を振り返り、印象に残る幾つかを紹介してみたい。

まずは両校の交流史の重みについてである。大田大にとって本学は最も古い交流相手であり、慎克範大田大総長のお言葉を借りれば「兄弟」のような存在だ。赴任後1〜2ヶ月間は、次々と先生方から研究室やアパートに電話がかかり食事等の誘いを受ける。かつて交換教員として本学に来られたか、本学からの交換教員と交流のあった方々である。中には、かなり前に退官された名誉教授からお誘いを受けて驚いたこともある。本学と大田大が築き上げてきた交流が、「人と人との交流史」としてキャンパスの内と外にしっかり積み上がっていることを感じ、改めて身が引き締まる思いである。

2つ目は授業でのあいさつである。チャイムが鳴り教室のドアを開けると、クラスの代表が号令かけて「起立・礼」で授業は始まる。言うまでもなく終わりは「起立、ありがとうございました」となる。日本では高校まではこれが当たり前だとしても、大学ではちょっと面食らう。しかし慣れると、このあいさつは、モノの始まりと終わりにケジメがついてなかなか良い。また授業が終わって自分で黒板を消そうとすると、学生たちが「先生がそんなことをしてはいけません」と言い、係りの学生が消してくれる。教員が自分で黒板を消すのは当然と思っていたが、これもちょっとした驚きである。筆者は本学に復帰して、これらを演習の授業にさっそく取り入れている。また本学に復帰した今年の春学期、講義「日本経済論」でちょっとした異変が起きた。受講生には筆者の演習Ⅲの学生や大田大か

らの留学生がいるのだが、講義の初回から演習Ⅲの学生二人が、自主的に黒板を消してくれるようになったからだ。たまたまこの二人が欠席の時には、いつも前列に陣取っている大田大の留学生たちが、黙ったまま消してくれた。筆者の演習授業での新たな実験が、学生たちに「押し付け」として受け取られていないことがうれしい。

3つ目も授業に関係するが、質問やテキストの音読を当てられた学生が「立ち往生」した時、必ず回りの学生が助け船を出すことである。時には助け船自体が正解でない場合もあって、これがまたクラスの笑いを誘い、きわめてリラックスした场景が生まれる。本学の演習授業でしばしば経験するあの「重苦しさ」が微塵もないのである。クラス全員の名前はもちろんそれ以上のプライバシーまでお互いに結構知っていて、一方では同学年でも歳が上だとオッパ（兄さん）、オンニ（姉さん）と呼び合い、緊急な場合でも携帯電話でたやすく連絡を取り合うことができる韓国の学生たちを見るにつけ、彼我の違いの大きさを感じざるをえない。

このような違いはどこから生まれてくるのか、にわかには説明できない。皮相的な模倣がナンセンスであることは言うまでもないが、教員と学生、学生相互間に横たわる様々な問題を解くのに大きなヒントを与えてくれた1年間であった。



日語日文学科の学生達と、濟州島に「卒業旅行」  
(2003年9月) (筆者は中央)



体育祭 Sports Festival

# 国際交流



寮の歓迎会 Welcome Party



新年度留学生オリエンテーション  
Orientation For Overseas Students



学園祭  
School Festival



# 写真館



小旅行 Field Trips



## 2004年海外往来

	交換留学生・教員 (派遣)	交換留学生・教員 (受入)
1月		
2月	大田大学校 (野間重光経済学部助教授) 帰国 大田大学校 (大道美妃、岩井優子、大洞時子、奥田瑠美)、深圳大学 (村山恵美、澤田麻梨子)、中国人民大学 (熊永憲)、北京外国語大学 (大川内良太) 帰国 ラトロープ大学 (松田聡、松岡裕美子)、ユニテック (松永梨江、奥野真衣) 出発	大田大学校 (朴喜南先生) 帰国 ラトロープ大学 (レベッカ リー、レベッカ ウォール)、大田大学校 (朴鐘順、崔珍美、黄晶民、韓美貞)、深圳大学 (刘思思、罗燕雯) 帰国
3月	大田大学校 (白石恵理佳、井元育、小塩美穂、立和田麻奈)、深圳大学 (則本智紀、吉川尚徳)、中国人民大学 (尾田美紀)、北京外国語大学 (東記久子) 出発 大田大学校 (西園寺明治商学部教授) 出発	大田大学校 (黄中叙先生) 来熊 キャロル大学 (金暎珍)、ベトナム国家大学ハノイ校 (グエン ティ ミン ロイ) 帰国 リバプールジョンモーズ大学 (マシュー アダムソン、デイビッド ラングボーン)、ラトロープ大学 (マーク パターソン) 来熊
4月	セント・メアリーズ大学 (中矢智子) 帰国	大田大学校 (李有碩、李尚勲、宋命燮、呉秀珍)、深圳大学 (潘燕萍、付細月) ベトナム国家大学ハノイ校 (チン ティ フォン タオ)、桂林市 (王悦偲、肖干/両名とも市受入) 来熊
5月	モンタナ州立大学 (河島悠里、中間大博、海津レイ)、モンタナ大学 (川原綾)、キャロル大学 (山口真理子)、カールトン大学 (下城由紀子、遠山由子)、リバプールジョンモーズ大学 (田邊亜弓)、インカーネットワーク大学 (本田美香/市派遣) 帰国	
6月	ウイソコンシン大学オークレア校 (桑本理多加、荻野順子)、リバプールジョンモーズ大学 (渡邊衣美) 帰国	
7月	広西師範大学 (前田麻美・寺本好見/両名とも市派遣) 帰国 カールトン大学 (村上真優美) 出発	モンタナ州立大学 (トリストラン ヴィック)、セント・メアリーズ大学 (マーク クロスビー)、リバプールジョンモーズ大学 (マシュー アダムソン、デイビッド ラングボーン)、ユニテック (フィリップ ウィルケス)、インカーネットワーク大学 (パトリック ミラー/市受入) 帰国
8月	モンタナ大学 (金榮緑経済学部助教授) 帰国 モンタナ州立大学 (平江美貴、内田朝子)、モンタナ大学 (境亜矢子)、キャロル大学 (阿倍有圭子、田中千春)、インカーネットワーク大学 (西岡朋美、金光聡美/市派遣)、ウイソコンシン大学オークレア校 (坂口恵梨香、井上晶子、村山麻由美)、リバプールジョンモーズ大学 (田屋ゆりこ、中川道雄) 出発	セント・メアリーズ大学 (コリン レニー)、チュラロンコン大学 (クラウキチクル プフルッチパン) 帰国
9月		深圳大学 (孫俊英先生) 来熊 モンタナ州立大学 (グラント ターナー、デイビッド コッタス、クリストファー ペトロニ、ジェシー ウェリング)、インカーネットワーク大学 (ショーン ウォルトン、ジェイコブ ロドリゲス コール/両名とも市受入)、セント・メアリーズ大学 (ジョン ベネット、トレバー ケネディ)、カールトン大学 (ダンカン ブルーム、クリス マエダ)、リバプールジョンモーズ大学 (リー ドリナン、ローラ ラベール)、ラトロープ大学 (ジョアンナ ライアン)、ユニテック (ジェフス、ウィレム スチール、ジェシエン ジャオ) 来熊
10月		
11月	ラトロープ大学 (松岡裕美子)、ユニテック (松永梨江) 帰国	
12月	ラトロープ大学 (松田聡)、ユニテック (奥野真衣) 帰国	

短期派遣・研修団	その他	
	ベセル大学ポール リーズナー氏一行来学 1/23	1月 2月
リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学への短期派遣留 学生(10名)出発 短期語学ホームステイプログラム[オーストラリアコース(21 名)2/3~2/29、ニュージーランドコース(10名)2/28~3/ 23]		
リバプールジョンモーズ大学、アルスター大学への短期派遣留 学生(10名)帰国	国際交流委員長一行アルスター大学訪問	3月
	カールトン大学デイビッド クレイ氏来学 4/21	4月
	広西師範大学梁宏学長一行 5/21、中国商工銀行 一行来学 5/19~21、ラトロープ大学マーティ ン ヴァン ラン氏来学 5/21~5/22	5月
大田大学校学生研修団来学 6/25	大田大学校経営行政・社会福祉大学院一行来学 6/5、セント・メアリーズ大学コリン ドゥズ 学長、デニス ルクレア氏来学 6/23~6/25、 EITヘレン ケンプ氏来学 6/23	6月
大田大学校学生研修団帰国 7/16	リバプールジョンモーズ大学ジョン コリンズ氏 来学 7/1 経済学部外国事情研修出発[アメリカコース 7/ 17、ニュージーランドコース 7/17] 外国語学部海外研修出発 [アメリカコース 7/ 26、ニュージーランドコース 7/26、韓国コ ース 7/27、中国コース 7/28]	7月
	経済学部外国事情研修帰国 [ニュージーランド コース 8/11、アメリカコース 8/12] 外国語学部海外研修帰国 [ニュージーランドコ ース 8/23、アメリカコース 8/25、韓国コ ース 8/24、中国コース 8/25]	8月
		9月
	モンタナ州立大学エリザベス ブランチフォード 氏来学 10/7、インカーネットワーク大学ルイ ス アグニスィ学長一行来学 10/21、モンタ ナ大学ホアナ アルカラ氏来学 10/26、梨花女 子大学校権赫珉氏来学 10/28 学長一行北京第二外国語学院、中国工商銀行訪問 10/23~10/26、理事長・学長一行大田大学校訪 問 10/27~10/30	10月
	EIT テレンス グレートレックス氏来学 11/11~11/12	11月
		12月

## 2004年度出身国（地域）別外国人留学生数

(2004年5月1日現在)

	学部留学生 Undergraduate					研究留学生 Undergraduate Research	大学院生 Graduate				交換留学生 Exchange	合計 Total
	1年	2年	3年	4年	合計		1年	2年	博士	合計		
中国 China	29	22	13	11	75	2	4	6	1	11	4	92
韓国 Korea		1			1						4	5
アメリカ U.S.A.											2	2
カナダ Canada											2	2
イギリス U.K.											3	3
オーストラリア Australia											1	1
ベトナム Vietnam			1		1						1	2
タイ Thailand											1	1
合計 Total	29	23	14	11	77	2	4	6	1	11	18	108

## 2004年度出身国（地域）別外国人留学生数

(2004年10月1日現在)

	学部留学生 Undergraduate					研究留学生 Undergraduate Research	大学院生 Graduate				交換留学生 Exchange	合計 Total
	1年	2年	3年	4年	合計		1年	2年	博士	合計		
中国 China	29	21	13	10	73	2	4	5	1	10	5	90
韓国 Korea		1			1						4	5
アメリカ U.S.A.											6	6
カナダ Canada											4	4
イギリス U.K.											2	2
オーストラリア Australia											2	2
ニュージーランド New Zealand											2	2
ベトナム Vietnam			1		1						1	2
モロッコ Morocco							1			1		1
合計 Total	29	22	14	10	75	2	5	5	1	11	26	114



## 本学留学生への交流の主な案内（2003年度）

名 称	主 催	内 容	期 日
留学生の会	熊本YWCA	ホームビジット先の紹介 行事への案内とご招待	随時
花の薪能	喜多流能楽	健軍神社で行われた薪能へのご招待	4/4
熊本市広域防災センター訪問	熊本学園大学国際交流センター	防災センターで消防事情講話と地震・ 台風・火災体験	4/10 9/11
新入生歓迎ピクニック	熊本学園大学学生自治会	南阿蘇アスベクタと阿蘇火口へのバスハイク	4/19
時代衣装展示会	熊本県国際交流協会	年1回の時代衣装公開への優待	4/20
郵政記念一日外務員	熊本市郵便局	一日外務員となり郵便物を配布	4/21
第16回熊本分区留学生交流会	熊本西ロータリークラブ	留学生と熊本在住青少年がウォークラ リを通じて国際交流	5/18
着付け教室	日本現代和装研究会	着物の着付け体験とお茶	6/5
日本舞踊教室	国際交流センター事務局	国際交流会館にて踊りの発表と指導	6/14
ポーリング大会&交流会	熊本商工会議所国際交流委員会	ポーリング大会を通じて、在熊留学生 と商工会議所の人達と交流	6/20
第13回外国人留学生弁論大会	熊本学園大学国際交流委員会	本学留学生の日本語による弁論大会	6/21
日本語クラスフィールドトリップ	熊本学園大学国際交流センター	阿蘇久木野村でそば打ち体験	6/25
“天平の羹”公演	「天平の羹」を見る会	“天平の羹”熊本公演の鑑賞	7/4
甲佐町夏祭“あゆまつり”	甲佐町国際交流協会	甲佐町の夏祭・花火大会参加と町民との交流	7/25
阿久根大島海水浴バスハイク	熊本商工会議所国際交流委員会	海水浴を通じて、在熊留学生と商工会 議所の人達と交流	8/3
火の国まつりおてもやん総おどり	熊本市振興事業団企画事業課	火の国まつり・おてもやん総おどり参加	8/12
第25回国際交流のつどい	北海道国際交流センター	北海道の家庭にホームステイしながら、 学校交流や地域交流に参加	8/16~30
中国国慶節祝賀会	中華人民共和国華僑総会	国慶節の祝賀会へ中国人留学生参加の 招待を受ける	10/1
サントリービール工場見学	熊本学園大学国際交流センター	サントリー九州熊本工場見学	10/30
託麻祭	熊本学園大学第一部学生自治会	外国人留学生の模擬店出店とステー ジイベント参加	11/1~11/3
体育祭	体育常任委員会	体育祭への種目参加	11/1
通潤橋・清和文楽鑑賞	熊本学園大学国際交流センター	バスフィールドトリップ 通潤橋・清和村文楽鑑賞	11/4
くまもとお城まつり	日本現在和装研究会	着物の着付けと散策	11/1~2
手打ちそば体験	熊本商工会議所 青年部	久木野村手打ちそば体験&サントリー ビール工場見学 会員との交流	11/16
交換留学生とのタベ	熊本学園大学	交換留学生と本学教職員との交流	11/17
秋の過酷なピクニック 3,333階段登り	熊本学園大学国際交流センター	中央町日本一の石段登り	11/24
留学生スポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学日本人学生と留学生とのスポー ツ交流と懇親会	11/13
企業人と留学生との交流会	YMCA フィランソロピー協会	熊本の企業人との交流会	11/13
お正月体験ホームステイ	国際交流協会「西端塾」	日本の家庭に7泊8日ホームステイし ながら、日本のお正月・文化を体験	12/28~1/4
成人式	日本現代和装研究会	着物の着付けと式典出席	1/12
ユネスコ能楽ワークショップ	熊本ユネスコ協会	能面の体験・仕舞の鑑賞など	1/24
和菓子作り	国際交流センター事務局	くまもと工芸会館にて和菓子作り体験	1/30
お茶会	裏千家青年部 国際ソロブチミスト熊本	茶道体験と昼食会	2/1
留学生を手作りで送る会	熊本商工会議所青年部	帰国する留学生の送別会	2/21
留學生産業技術交流会	九州経済産業局国際部	ロボット産業を中心に北九州での体験 学習会	2/26~2/27
からいも交流	財団法人カラモジア	鹿児島・宮崎での2週間のホームステイ	3/14~3/28
ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	通潤橋・清和村へユネスコ会員とのバ ス旅行交流会	3/14
異文化理解教育による幼稚園・ 小学校・中学校の訪問	春竹小学校（7月8日） 中学校（8月7日） 帯山西小学校（2月9日）		

## 交換教員紹介



黄中叙 先生  
(韓国・大田大学校)  
2004年3月から1年間、交換教員として韓国語を担当



孙俊英 先生  
(中国・深圳大学)  
2004年9月から半年間、交換教員として中国語を担当



西園寺 明治 先生  
(経済学部教授)  
2004年3月から1年間、交換教員として韓国・大田大学校へ

## 2004年研修団往来

### 〈受入〉

研修団名	研修期間	団員数
大田大学校学生研修団	6月25日(金)～7月16日(金)	20名

### 〈派遣〉

研修団名	研修期間	期間	研修先	団員数
経済学部外国事情研修アメリカコース	7月17日(土)～8月12日(木)	27日間	モンタナ大学	13名
経済学部外国事情研修 ニュージーランドコース	7月17日(土)～8月11日(水)	26日間	ユニテック オークランド大学 E I T	15名 16名 16名
外国語学部海外研修アメリカコース	7月26日(月)～8月25日(水)	31日間	ベセル大学	54名
外国語学部海外研修 ニュージーランドコース	7月26日(月)～8月23日(月)	29日間	ユニテック	23名
外国語学部海外研修韓国コース	7月27日(火)～8月24日(火)	29日間	梨花女子大学校	17名
外国語学部海外研修中国コース	7月28日(水)～8月25日(水)	29日間	北京第二外国語学院	55名



経済学部外国事情研修アメリカコース



外国語学部海外研修韓国コース

## INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE MEMBERS

### 国際交流委員会メンバー

2004年1月～2005年12月

国際交流委員長 Chair	佐藤 勇治 SATO, Yuji		
商学部 Faculty of Commerce	木下 隆雄 KINOSHITA, Takao	杉田 憲道 SUGITA, Norimichi	
経済学部 Faculty of Economics	小川 弘和 OGAWA, Hirokazu	中敷領 孝能 NAKASHIKIRYO, Takayoshi	
外国語学部 Faculty of Foreign Languages	西 紀昭 NISHI, Noriaki	向井 久美子 MUKAI, Kumiko	
社会福祉学部 Faculty of Social Welfare	落合 俊行 OCHIAI, Toshiyuki	小泉 尚樹 KOIZUMI, Naoki	
国際交流センター事務室 Office of International Programs	田中 和穂 TANAKA, Kazuho	岡村 健一 OKAMURA, Kenichi	

## OFFICE STAFF MEMBERS

### 国際交流センター事務室職員

部長	田中 和穂 TANAKA, Kazuho		
室長	岡村 健一 OKAMURA, Kenichi		
係長	喜佐田 知子 KISADA, Tomoko	英語圏、東南アジア、学部研修	
	切通 しのぶ KIRITOSHI, Shinobu	韓国、中国、学部研修、私費留学生	
	矢澤 恵子 YAZAWA, Keiko	英語圏、学部研修	
	大澤 菜穂子 OSAWA, Nahoko	英語圏	
	寺田 一利 TERADA, Kazutoshi	国際交流会館（事務室）	

## OFFICE HOURS

### 窓口時間

平日	Monday-Friday	9:00～12:30	13:30～17:00
土曜日	Saturday	9:00～12:30	

## CONTACT ADDRESS

### お問い合わせ先

〒862-8680 熊本市大江2丁目5番1号 熊本学園大学 国際交流センター事務室 TEL 096-366-3230（直通） FAX 096-372-4112（専用）	Office of International Programs Kumamoto Gakuen University 2-5-1 Oe, Kumamoto 862-8680 TEL +81-96-366-3230 FAX +81-96-372-4112
E-mail : ipkgu@kumagaku.ac.jp U R L : <a href="http://www.kumagaku.ac.jp/office/kokko/index.htm">http://www.kumagaku.ac.jp/office/kokko/index.htm</a>	



〒862-8680 熊本市大江2丁目5番1号  
電話(096)364-5161  
<http://www.kumagaku.ac.jp>

